海の詩集

佐藤清著

海の詩集

佐藤清著

海の詩集

佐藤清著

海の詩集

佐藤清著

海乃詩集

佐藤清著

大正十二年版

海の詩集

佐藤清著

海乃詩集

佐藤清著

此の詩集に收めた詩篇は私の第二詩集『愛と音樂』以後になつたもので、大正八年六月から大正十一年末まで、約四年間の作である。私は今是等の詩を後にして更に私の孤獨なる詩の道に進まうとしてゐる。『我笛吹けども汝等躍らず、悲しみを爲せども胸擊たず』といふ言葉はあつても、私は生涯私の笛を棄てまい。又悲しみの歌をもやめないであらう。私は勇氣を振つて詩の淺瀨を越へ、悲愴にして沈痛なる沖に向つて泳ぎ入りたい。

大正十二年三月

表紙及び扉

村井榮二氏

海……一
さびしき泳ぎ手……四
海に向ひて……八
潜水夫の夢……一〇
網……一二
祈……一五
六月……一七
夢……二二

二　人……二四
桐の路……二八
愛と死……三一
ヴェールを破つて……三四
ちのみご……三七
ちのみごの言葉……三九
あらしの中のちのみご……四二

四月……四八
日光の秘密を守るもの……五〇
五月……五五
七月……五六
樹下に坐りて……五八
空想……六〇
落日……六一
十一月……六三

法悦の断片……六五
憧憬……六九
日没の後……七二
響導……七七
戰争……八〇
不滅の別離……八四
酒杯の悲劇……九〇

海

わたしの胸のなかで、
あぶらの浪が藍のほのほを揚げる、
見渡せば、むらさきの虹が
やはらかい練絹を織つてゐる。

けれど私の胸のなかには、
殘忍な颶風と、慓悍な
氷雪と、惡鬼を凌ぐ

果敢な寒流が狂ひ合うて、
やみと、死と、あをじろい
滅亡を企て、また、仕遂げてゐる。

わたしのこゑはみごりのささやきで
始まり、まつしろいつぶやきを
つづけ、惱亂の歌となり、
砂礫うつ龍卷の怒號となる。

けれど若しあのやさしい月が
わたしの胸にくちびるをあて、

いつもまんまるい天鵞絨のくちびるを
押しあててゐてくれるなら、
わたしだつて藍のまぶたをそつとあき、
いつもいい夢ばかり見てようものを——

月のこころは刹那にかはる、
だから、わたしのこころも刹那にかはるのだ——
そしてほかに道がないのだ、そのほかに、
みちがないのだ。だつて思つても見るがいい、
かはつてばかりゐる月がなかつたら、
あの月がなかつたら、

わたしは海草のやうにしをれてしまふだろ。

さびしき泳ぎ手

なだらかに砂利を歌はす
岸近い波浪のなか、
たわむれる群を離れ、
行く、泳ぎ手。

魚類の涙の歌、
底なびく海草を洩れ、

しづめる鐘のごとく、
泳ぎ手の身にこたゆる。

けれど筋肉のひとすぢにも、
水銀のしびれを知らず、
さびしき泳ぎ手はゆく、
烈日にくらむしぶきのなかを。

つめたい汐に身うち燃ゆ、
しづかな鼓動に呼吸はづみ、
吹きまく木枯に包まるる

溫室の花のごとく、

肩にくだける浪のあひに、
罌粟咲き、くちびるに吹きちる
なみのあひに紫の虹消ゑ、
白い日は銅色にかたむき、

やがて波濤の砦、かれを圍み——
寸浮び、寸沈み、
寸また浮びて、からくゆく、
死刑臺に首だけを見るやうに。

かの大統領の幕僚等、
ひそかにたくむ陰謀を知りながら、
たたかひのなかば奴隷解放を
宣したる極みなき孤獨も、

また、かの新婚の蜜にひたりつつ、
いくたびか死を呼び求め、
なやみたるレーヴィンの孤獨も、
こもごもひらめき去る、蒼白い胸を。

けれどさびしき泳ぎ手はゆく、

魚はかなしみに濡れそぼち、
汐は鉛の痲痺をあわだて、
日を沈めて水平線はあこもなけれど。

海に向ひて

さかまき狂ふ海よ、
くらい夜におほひかぶさり、
わたしの身におほひかぶさる、
海よ、おゝ、海よ。

やみが空に巻きつく如く、
地に巻きつき、
わたしの身に巻きつき、
いきのねこめよ、おゝ、海よ。

愛のきはみに肉は滅び、
燃ゆるよろこびに死は接吻す。
恍惚の身にせまりきて、
いきのねこめよ、おゝ、海よ。

快樂こ苦悩の煮えあふれる、

強く燃にさかる生命が、
今うちかかる浪を招く。
海よ、おゝ、海よ。

潜水夫の夢

海底ふかくおもいからだが
潮にゆられてごうもならぬ。
逆さまに沈んで立つてる船は、
暴風のやうな聲をあげてゐる。
ほのぐらいみぎりの冷たさが、

そのころのたんびにこたへてくる。
海底ふかくおもいからだは、
潮にゆられてごうもならぬ。

窓にあたつて碎ける水のなかに、
無數のほそい黑蛇のむれが、
うちまざつて、軋り、ひしめき、うち掛つてゐる。
その窓のやみのなかから、
ひとつの腕が、手が、五本の指が、
苦惱を堅く握りしめて突き出てゐる。
窓はあいてゐて入口が見あたらぬ。

船體は身もだゑして、
裂かれるやうな悲鳴をあげる。
海底ふかくおもいからだは、
潮のながれにごうもならぬ。
ほのぐらいみぎりの冷たさが、
刻一刻にひごくこたへてくる。

網

たくましい漁夫の指、
まつしろに乾いた網を縫ふ、
くされ藁くされ果て、
螢うまれるほごの網乾き、
枯笹のやうにこわばつた網を縫ふ、
たくましい漁夫の指。
網引きしほられ、引きしほられる
力に應じて船は傾き、
傾くと見るまに船を打ちくる、
海底の凄慘な香氣——
鮮血ほとばしりて動脈を吹き出づれば、

空氣を蜥蜴色に染めなすやうに。
生氣を頓に失へる、
海底の神秘を吐き出だす
網ひとすぢを隔つれば、
一寸さきも見とほしがたき、
濃藍燃ゆる浪のうねり、
さわやかにはげしく、躍る、
心臓に收まつてゐる血が
すこやかな皮膚の下をめぐる如く。

まつしろに乾いた網を縫ふ
たくましい漁夫の指、
網をはなれて高く眉に觸れる時、
日は晴れて、ここちよく、
東に走るいくつかの帆に、
かれの深い目はさざなみをうつ。

祈

かなしく祭壇にふす
をとめの祈にまじる、

草の葉のしめれるかをり、
草の葉に照る
ほのじろき月光。

また、月光のかなたの
れもんしゆる
岸のからき汐の花。

素馨の祈、
あかしやの祈、
永劫の夏空の祈——

海を越してすすりなく
おなじ姉妹らの祈も、

かなしく祭壇にふす
をとめの祈にまじり、
堂のすみずみに、
満ちゆく、いたましき
なやみの紫のかをりよ。

六月

秒はくる、秒はくる。

脈うつごとに秒はくる。
はてなき「時」の庫を出で、
秒と秒とはわれにくる。

うちかさなりて迫りくる
秒と秒とは洎夫藍の
あけぼのの色、眠こき
罌粟の色して迫りくる。

洎夫藍色の秒はくる。
罌粟の緋色の秒はくる。

秒と秒とはかさなりて、
罌粟洎夫藍の秒はくる。

秒と秒とはかさなりて、
あやなす色のこまやかに
なれば、ああ、氣もとほくなる
かをり、秒より湧きおこる。

髮と密柑と、くちびると
林檎と、まるき乳首と
あかき苺と、まつしろき

肌こばいなの秒はくる。

秒こ秒こはかさなりて、
いよいよ密にかさなりて、
色こかをりの秒こ秒、
雲のごこくに迫りくる。

ああ、かをりよき秒こ秒、
あまりに密にかさなれば、
あまりにつよくかさなれば、
そしてはげしく流るれば、

音樂おこる、音樂おこる、
洎夫藍の紫の音樂、
罌粟の緋色の音樂、
秒こ秒この音樂おこる。

密柑の花の音樂、
みごりの髪の音樂、
林檎の花の音樂、
くちびるの默せる音樂。

まるい乳房の音樂、

あかい苺の音樂、
まつしろい肌の音樂、
琥珀のばないなの音樂。

秒と秒とはかさなりきたる。
不思議なる音樂を奏しつつ、
未知の世界、愛の世界を、
もたらすために秒はくる。

夢

濃藍のけむりをまとふ果樹園の
木々やはらかき枝さしかはし、
枝ごとにさみどりの葉をきざみ、
をとめらのけがれなき心臓よりも
あざやかにすきとほる葉のあひに、
いだかるる黄金の花の上、
いちいちの黄金の花の上、
鶇は「時」の彼岸のしらべに、
やまひさへ忘れしむる聲に鳴く。

かげ光るふかき眠のなか、

魚の如く靈の浮び、また、沈む
ごゝに、むらさきの夢泡だち浮び、
まだ沈むまばたきのまに、見よ、くしき
けむりをまゝふ木を、枝を、
枝ごゝにきざまるるさみどりの葉を、
さみどりの葉に抱かるる黄金の花を、
花の上に「時」の彼岸のしらべを
うたふ鶇を、わがこひびゝを。

二　人

あまい戰慄につづく
刹那の緋色の恍惚、
くりかへされるごゝに、
いよいよはげしく、いきぐるしく、
最後に太陽の失神に陷る。

さわやかな綠葉は、そよぎながら
みうごきせぬ二人をおほひ、
二人をつつむ綠こき空氣は、
すみて、默つて、しづかに滿ちる。

火のなかに露をふくむよつのくちびる、
おのづからはなれる時、
たべあいた林檎の實のかをり、
身のまわりにまつはるごとく、

二人のすこやかなからだから、
神秘なかをりがにほひいで、
からみあひ、たゆたひ、たなびきて、
みごりの空氣をいろごりちりばめる。

そは髪の香か、いきのかをりか、

にじめる心地よき汗の香か、
そばに花咲く薔薇の香か、
それとも秘密な所よりの靈液か。

よひやみにとものされたともしびが、
四方のくらやみを集めるごとく、
みごりの上のまひるの光にもかかはらず、
やがて二人のまぶたは眠をよびよせる。

祭壇の上のふたつのいけにに、
ふたつの香爐——

ふたつの靈は燃ねつきることなく、
こけあひて、しづかに、しづかに、のぼる。

桐の路

桐の並木、たかだかと、
うすむらさきの鐘なりの
花も、人げもないけれど、
花やかな孤獨の夕日、
うつらふ、わたしの行く路に。

木がくれの丘陵の上、
ほのかに浮ぶ薄雲の
あひまに、空が澄んでゐる、
玉を入江にしづめた如く。

花も人げもないけれど、
世はみづみづしく滿ちてゐる。
あゝ、いろんな鳥が、
空で、木蔭で、やぶかげで、
まをおきおき鳴いてゐる。
「世はみづみづしく滿ちてゐる」と。

愛するものは遠けれど、
いらいらしたる淋しさも、
あこがれも更になく、
血はしつとりと收まりて、
程よくおだやかに滿ちてゐる。

桐の小路よ、夏路よ、
わたしは今こころ滿ち、
おまへの上を通りすぎる、
滿ちた生命を傾けに、
かなたへ、愛するものへ。

愛と死

愛の秘密が破れる時、
なやみは燃ゆる恍惚となる。
燃にながらすずしい雨を伴ふ、
まほろしを生む恍惚となる。

愛の恍惚の園の奥の、
素馨のかをり最もつよいところ、
死は洎夫藍の覆面して、

仙女のごとく忍び寄る。

死は愛の恍惚よりも深く、
強く、かぎりなく、なつかしいと、
ささやきながら、仙女の如く寄りすすむ、
泊夫藍の覆面したる「死」！

死は無上のなやみと見ゆるが、
そはたまたま無上の恍惚の證據である。
秘密におののく苦悩は、
愛も、死も、かはりがないからだ。

愛のつつましさが破れ、
處女性が最初の傷をうけて、
はじめて、すずしい燃ゆる雨を伴なふ
愛の恍惚の秘密にいる如く、

泊夫藍の覆面したる仙女について、
まつしぐらに花咲く園に踏み入り、
生を破る刹那のいたみに堪へる時、
無上の恍惚——死のあづまやに許される。

おお、泊夫藍の覆面して忍び寄る、

なつかしい死よ、姉よ、
この生命をふきけして、導き入れよ、
愛の愛、いのちのいのちに。

ヴェールを破つて

（野村隈畔一周忌に）

絶望はすずしい谷蔭のやうに、
燃ゆる胸の血をしづめる。
恥辱はからい胡椒のやうに、
甘すぎる唇をやはらげる。

くらい牢獄の思出は、
夜の薔薇のやうに、
幸福の緑葉を調和する。
きたへ上げた叡智さへ、
いくたびか破られた戰ひを、
わたしは今新たにする。此の幸福に依つて。

海はほのかに暗く聲をあげ、
月光をまこうて臥してゐる。
海のかなたに呪はれた世は、
慘澹として身もだえてゐる。

それらのものの秘密をあばいた此の手、
それがために鎖につながれた此の手、
今かたく、やはらかい他の手を握り、
無上の力に醉うてゐる。

いく年か、鐵壁のやうに思はれたものも、
今は、吹けば飛ぶ羽毛のやうに思はれる。
わたしは今愛するものゝ足つまだてて、
巖頭たかく立ちあがる。
そして今こそ引き裂いてしまふ、
生命を隱す「死」のヴェールを。

ちのみご

ちのみごの顏に、
みごりの葉かけはふるひ、
みごりのかけをすかして、
あかるき空はふかく、
ふかく澄みきり、
みはれる目に藍をうつす。

小鳥のよろこぶこゑは

ちのみごの眉に動き、
唇に動き、
歎息こさへなる。

小鳥のよろこびは、やがて、
ちのみごのまぶたを閉ぢ、
うつくしき睫毛をそろへる。
そしてちのみごの眠のなかにひびき、
澄みきる眠のなかにひびき、
たへまなきにくぼをつくる。

小鳥のこゑはこゑなく
ちのみごの眠のなかにひびき、
ちのみごは聲なき音樂となる。

ちのみごの言葉

乳呑みをへてちのみごは自然に笑ひ、
笑ひながら不思議な歌をうたふ。
そはかれの見るあたたかい花、
すずしい木蔭、目近う浮ぶ
琥珀の空についてではない。

——それらの力はきわめてかすかだから——
天才と戀と狂のほか、
おごそかな生の律動のなかに、
入りまざりて調和し得る
ただ一つの無絃琴——
露をも默せしめる重い睡眠
によりて、かれは今うたふのだ、
（やはらかい土からぬけ出でた
堅い莖のはしばしに、
みづみづした薔薇の花びらの
あかい皷動と調和して、

銀の香おもく、風がふるへるやうに、）
かれは今生の律動を歌ふのだ。
深く入りまざつて生きてゐた
刹那のまへの律動を、
神秘な土のなかに動いてゐる、生の
律動——蟲、魚、けもの、及び、
樹木、石、岩をこわし、
また果てしなく造る、土のなかに
動いてゐる、生の律動を歌ふのだ。
笑ひながら不思議な歌をうたふ
ちのみごのうちに、花はとけこみ、

樹蔭はすずしく入りまざり、
空は琥珀にながれ入り——
睡眠の魔の力で調和し得た、
まつしろの音樂の海の上の
いくらかの浪として、ほのかな聲として、
不思議な曲を作り、かれは今それを歌ふのだ。

あらしの中のちのみご

道路に流れる血、

にじんで吹きまく塵、
けむり、火花、砲彈、
もみあひ、すりあふ虚空に、
うなる流動電氣のやみの上、
ほのかな極光くるふ
なかに、ちのみごは靜かに眠る。

おのおのの房のなか、
葡萄の青い汁液が、
水銀を凝りなして、
紫に日光をこかしてをるほど、

しづかに眠る。あるひは、また、
みぞりの草を躍り越ゑ、
小石をまろばす力を爲して、
湧きぐちを出づるまへ——
やみと薄明の地の襞を
うねり流れる清水の聲ほどの
かすかな息を呼吸して、
しづかに眠る。

やがてけむりは消ゑ、
砲彈はくだけ、幽靈のあとも なく

火花は燃ゑつき、
螢のかをりも殘らぬ流動電氣、
むささびの聲もなく過ぎ行き、
氷山の北を求めて去る
異常の極光と、それを包む
やみは、白百合のあけぼのの
なかにとけ行き、あらしは徐々に
なめらかな白蛇のからを脱するごとく、
青空に吸はれて消ゑる
雲のごとく、そこともなく
收まり、泉の底の明星のごとく——

かすかにしづまりて、ちのみごの
乳香のいきにうちまざり、
まざりあひ、こけあひて、白金の
刹那、一抹のけむりとなる。

むざんに吹きこほつたあらしの
あとに、傾いた壁は、しづけさに
おびゐて、落ちる梁をおのづとひかゐ、
藍すみわたる空の無心に、
屋根はすべり碎ける瓦をつかみ、
こけたまま火の中に生きのこつた

刺のみ目立つ薔薇は、
餘りの音無さに、露を、地に、
ふりおとす無造作をつつしみ、
野一面、根もとからむしられて、
わづかに青い雜草も、
おののきをやめ、川底の砂を
つかんで、すくひとられた流れも、
いきをひそめ、野のはて遠く、
胸を合せて連なる空の
水平線を包む靄のなかに、
あけの明星も默つたまま沈みゆき、

ただきこゆるは、日光を紫に
かもしてゐる葡萄の酒のつぶやき——
ちのみごのかんばしき呼吸、
やがて全地にひろがる日光の歌である。

四　月

そら豆畑のいろなき花に、
かんむりつけてつらなれる
さあをの麥に、薄明の
からからの風そよぎ、

かろき鉛の板をのべ、
しわさへよせぬ海のかなたに、
まぢかくも、蒼白の火はこもり、

耳にせまりて、雲雀のこゑの
さまよふ空に、眉ちかく、
さみごりの星は照り、

ひこすぢの煤煙、そのうへに、
なだらかにたなびける。

ああ、かくもしづけく凝りなせる
刹那の風景のいのちに、
わがうちのあこがれはしづめられ、
この風景のかげに流るる、
見ねざるものの濕氣にひたる。

日光の祕密を守るもの

日光のまばゆい秘密を
何が最もよく守る？——
白晝のなかにかき消ねる

色なき流星の尾か。
落日と驟雨のあひに、
草の上に、折れ曲る虹か。
ただよふ雲と、眠れる海の
あひだになびく濃いかげか。

つらなる音の枝々の
なかに、秘密を押しかくす
音樂家のなげきのやうに、
雲雀は空の奥に、
ほのほの聲をあげ、

聲のほのほのなかに、
日光の秘密をかくす。

みごりに凝りて透きこほる
莖に、金粉の花をつけ、
葉の花は秘密を守る。
暖かい繪具の迷宮の
なかに、悲しい秘密をぬりつぶす
畫家の吐息のやうに、
莖に金粉の花をつけ、
葉の花は日光の秘密を守る。

葉の花を蔽ひ立つ
樫の木のりりしき沈默は
暴風をさへ避けて通らせる。
岩檜葉をむしりとられた岩のやうに、
無造作に落書のきづを晒し、
そそり立つ幹のなか、
(まだむかれない密柑、或ひは林檎の
なかに、密閉する香氣のやうに)
日光の秘密が保たれる。

密、或ひは葡萄酒に

守られる日光のそれよりも、
ここにひそむは、
すがすがしい朝に消え
殘る星のかをりのそれだ。

笑ひ、なみだ、殘忍、
誹謗、爭ひのなかに、
押しかくす類に似ず、
慈悲のなかに、
聖人の押しかくす秘密のやうに
沈默りりしき樫の木は、

最もよく日光の秘密を守る。

五月

白つぽい光の朝空に向つて、
銀杏の木がみごりの噴水を
さかんに、はげしく、ふきつける。
太陽の髪はしぶきに濡れて、
艶に、やさしく、はづかしげに、
みごりのかげにたゆたうてゐる。

おゝ、五月よろこびの月、
はげしいもの、滅びないものが、
やはらかに、つつましく、
みづみづしく生きる月——
空はしろつぼくうるんで、
なつかしい處女のやうである。

七月

おぎなはれて殖ゑゆく血汐が、
指さきの末梢神經に

さはやかに感じられる旅の七月。
撫も溢れる汁液に堪へぬのか、
みぎり深く凝りなす空に向つて、
力をこめて木末をゆする。
芒も青く澄んでふるひ、
あらんかぎりの風を呼んで、
まぢかく蔽ふ空にささやく。
おゝ、七月人には失はれた血を

補ひ、草木には汁液を
綠に、或ひは青く、すこやかに滿たす。
愛するものは遠けれど、こころ
おだやかに、たのしく、
あこがれも靜かに綠である。

樹下に坐りて

かず限りない梅の實は、
みごり葉のなかにしづまり、

かなりに太い枝をたわませ、
ほのぐらく弓なりに垂れてゐる。
如何にも强くそれをささへる
小牛の脚ほどの幹。
今それを見つめてゐるこ、
一番親しいものがそば近く、
ぢつこだまつてゐるやうである。
又やはらかい金盞花が、
しつこりこ、深く、なまめかしく、
素足をうづめ、眞紅の薔薇が
足のうらにかぐはしく踏まれる。

もう暗くなつた。木と、人と、
わたしとが一つになつて目醒めてゐる。

空想

夕雲のはしから火がついて、
風にめら〳〵燃にあがる西空、
薄雲が、ほのめき出づる星を
ちりばめて行く西南の空、
白い香がいくすぢもいくすぢも
中天に向つて焚かれる南の空——

私はそのかけに深く澄んでゐる
碧玉の空をじつと見つめる。
まほろしの川のそばで、
まほろしのひびきに包まれて、
私の心情が滅び去つてしまふまで。

落日

滿月よりも赤い、まあるいものが……
太陽が……珍らしい太陽が
地平に近く浮んでゐる、

卵色の空をほつと銅色にかすめて。
ちようど末廣がりの川口の
まんなかほどのところに。

きいろい草の川べりには、
火が燃えて、風が立つてゐる、
ちろちろと水に映つて。
東の方の空は晴れて、
煤煙が柱のやうに立つてゐる。
電車は笛を吹き鳴らし、吹き鳴らし、

何てくさい家のあひだを走るのだらう。
おお、もう大阪なのだ。

十一月

夕ぐれの雨はやんだ——
しめつぽい風を吹き送る雲は、
峰々のかげから湧き上つてくるが——
夕ぐれの雨はやんだ。

みぞり濃き中腹のほとり、

躍り立つけむり、
おびゐた白蛇のやうに、
うねり、なびき、這ひ、まつはり、
峰をめぐる。

湧きくる雲は、けむりを
より合せて西を包み、
そのなかに落日をかくしゐて、
夜の火事を見るやうである。

更に進みゆくにつれ、

やけ跡にくろこげの並列の
柱のごとく立ちのぼる煤煙の
柱――柱頭はくづれて、
おほひかぶさる雲となだれる。

見わたせば灣内の碇泊船、
かりねの夢の合圖かと思はれる
ほのじろいあかりをともし始めた。

法悦の斷片

神よりもくすしき力、
陽よりもつよくわれにのぞみ、
色身みぢんにもえつきて、
ときはなたれしうちなる靈、
すみきりてあざやかに見る、
萬有の衣のかげに、
造られながら深くひそめる、
虹よりもあたらしき、
くしき世界を。

そこに

踏まるる草は踏まるるがため、
いよいよあかき花をつけ、
折らるる木々は折らるるがため、
さみごりをまし、しげりを加へ、
釣らるる魚は釣らるるがため、
鰭はかがやき、鱗はひかる。

朝雲こほく飛べるはがひを、
射ぬかれて地に落つるため、
天をゆく荒鷲のつばさは強く。
ほふらるる羊のなげき、

あしぶねのひびきにかよふため、
かれの身はここしへに銀にかがやく。

そこにすむものの
心頭にいかりのくるふ時、
口中に蜜よりあまき
忍冬のかをりみち、
おさなごの生絹の胸を、
さいはひにふるはしむ。
緋色なすみだらの思ひ、
みなぎりて人の身をよごす時、

緋色の海栗は海にふね、
緋色の海栗のむれより、
すずしき衣通、
あやなす小町、
アイアランドの悲しきディダア、
うつくしきギリシャのヘレン、
泡よりしげく生れ……

憧憬

いくにちも、いくにちも、山を仰ぎ、

山に向つてあこがれた心、
いつも日ぐれには非力の空虚が、
しやぼんの泡のやうに魂のへりをよごした。

いくにちも、いくにちも、海にのぞみ、
海を眺めてあこがれた心、
いつも日ぐれには果敢ない夢のかけが、
盃の滓のやうに魂のへりをよごした。

或るあさまだき、すずしい雨が、
わたしの小さい庭にふり、

たけ低い菊の葉、日向葵の葉、
秋海棠のうすみどりの廣い葉、
名もない灌木のやはらかい葉が、
鏡にうつつたやうに浮き出でた。

私は山を忘れた。土を積んで、
雲にこごき、天にあこがれる山を。
また海を忘れた。はげしく狂ひ、
美と死とを一つにする海を。
そしてひたすらにみどり葉を見つめた。

見よ、ひとつひとつの葉の上に、
みどりの靈がみどりに光り、
其の刹那、目も醒めるばかりに、
地のヴェールのかけの斷片が露出してゐるを。
草木の滿ち滿てる生命のみどりに、
燃ゆる血は適度にしづまりて、
うちに滿ち、欲望は金に染まる——
おゝ、みどりは神である。神はみどりである。

日没の後

山なみのうしろに沈んだ日の
寂光しづかに西を染め、
まばたきもせぬ空の下、山の端近く、
噴水の泡のやうに湧き起る
白光——やがてそれも影を消す。

あしもとに踏まれてゐる雜草は
力かぎりの緑に透きとほり、
最後の光線に別れを惜しみながら、
飽くまでも夏の酒盃を離さない。

仰げば中天の二重の雲、
蘭麝色と灰色と、
押しかさなりて、南へ、南へ、
みごりの傾斜にそうて、
悠々海上に流れて行く。

傾斜上の白壁の一局部、
見よ、此時、無煙の火を起す。
驚くまもなく、火は刹那にやんで、
白壁は死んだもののやうに蒼ざめる。

蒼ざめて立つ白壁のかなた、
秋を恐れて飛び交ふ燕のかなた、
水平を壓して群がる緋色の雲が、
西空に消ゆ残る寂光に反照する。

海と傾斜がぎざぎざの線を引いて、
宵やみの緑こくけぶるところ、
破壊せる殿堂の柱のやうに、
立ち並んでゐる煙筒のかげに、
はや、明星は輝き、電燈はともつたが、

不思議にも、汽笛の白煙は消ゑ、
輪轉機の動亂はやんで、
毒々しい一條の煤煙さへ、
此の夕空を汚さんと上らない。

大いなる爭鬪をあとにして、
日は山の端をかけおりた。
煤煙を絶つ多くの煙筒は
惡鬼の默り劇のやうに、
夜空に伸びちぢみして、
そこに小さく光る星屑をさへちぎりとらうとしてゐる。

嚮導

嚮導は歡呼のなかに立つてゐる。
民衆の興奮の偶像なる嚮導は、
微笑して歡呼のなかに立つてゐる。

喇叭はひびき、旗はたなびき、
目に見ゑぬ「時代」の力は、
民衆の胸に猛獸の血を湧かす。

嚮導は歡呼のなかに立つてゐる。

けれど、遙か、かなたには、
劍、砲彈、瓦礫――
刑場の苦と汚名がある。
血煙によごれた死がある。

嚮導は歡呼のなかに立ちながら
ひとり前途の思ひに耽る。
民衆は偶像のぐるりにたかつて、
喇叭を吹き、旗を振る。

嚮導はすべての禍ひをかへて、
幸ひとする道の思ひに耽る。
けれど彼はその時民衆を忘れた。
そしてすべてよしと叫んだ。

かくて民衆の上に劍が來た。
砲彈と瓦礫が飛んだ。
刑場と汚名がせまつた。
血煙によごれた死が來た。

けれど嚮導はすべての禍ひを

幸ひこする道を知つてゐた。
死さへも彼のまへをよけた。
刑場こ瓦礫さへ彼をよけた。
汚名さへ色をかへて、
彼のために榮譽こなつた。

絶望が歡呼に代つた時、
嚮導の微笑は自己のなかに隱れた。

戰爭

針がたたぬ程羅紗はかたい、
軍服の羅紗はかたい、
縫つて、縫つて、縫ひ積んでも、
かりぬひはまだ山をなしてゐる。

中指はひごくうづき、
人差指は膨れあがつてゐる、
針はちらちらこ瞼をしぶらせて、
目のなかがしびれるやうだ。

あかりは暗く、火はこほしく、

からだは飢ゑて、凍にてゐる。
すきまの風は野ざらしのやうに、
壁隣の酒亂を吹いてくる。

輸送される兵士の足音が、
凍てついた道路の果に消にてしまふ、
まもなく汽笛が遠くで鳴る、
萬歳のこゑがかすかにきこにる。

くらいランプの油煙の下に、
ちのみごが青白う臥してゐる。

女はなほもかたい羅紗に
痲痺した針をさしこんでゐる。

よあけまへに仕上げなくてはならぬ
義務だけが今は女をこらへてゐる。
子も、飢も、戰爭も、
指のいたみも夢幻のやうになつて。

朝まだき請負の商人が
手ばしこく品物をこりに來た、
その時、女はうつむけに倒れてた、

針のミほらぬかたい羅紗の上に。

不滅の別離

二十年前の黍の葉ずれ、
雜木紅葉、草紅葉、
おほきくよひのあらし吹き、
木立を越して流れくる幽かな月光。

（おお、不滅の別離！）

友の眉はけわしく、目はきらきらと、
露を帶び、默して悲しむ
わたしの胸は露よりも
ふかく濡れて、風に吹かれながら
山そばみちに一緒に立ちつくす。

（おお、不滅の別離！）

父の臨終に時を失ひ、
よびかへされた友は、異母兄弟の
意地わるい批難にそむき、

にげ行かうとする影うすく、
わたしの小さい影にかさなる。

（おお、不滅の別離！）

粥をすすり、ペンを買ふ金にさへ
缺くこと多く、蝙蝠傘もちしことなき
わたしの身には母ひとりだが、
おお、今、友のたづね行かうとする
母はこの山奥に狂してゐる。

（おお、不滅の別離！）

兄弟といひ、親族といひ、
わたしの母をしひたげたすべての男に、
反抗して貧苦のかげに戰ふ腕の下に、
わたしは育ち、あこがれ、なやんだが、
友の母はこの山奥に狂してゐる。

（おお、不滅の別離！）

罪なき苦悩は分娩前の女の

苦悩の如く堪へがたく、しかも、のぞみに
満ちてゐるやうに、また、冷たけれど、
光る露のやうに、神のなやみの如き
健康な生命の壓迫が感ぜられる。

（おお、不滅の別離！）

あらしはいよいよ強く、寒く、
山そばみちに添ふ雜木紅葉を、
強み加はる月光のなかに吹き散らしながら、
くらくなる空を、くらい地にひきおろし、

ひきおろし、ふたりの上に蔽ひかぶさる。

（おお、不滅の別離！）

友はやがてわたしと握手をかはし、
帽子を打ちふり、打ちふり、山にわけ入つた、
その顔が木蔭のやみに消ゐるこ、
狂してゐる友の母の顔がしろく、
ひらひらこ散る紅葉の中空に浮かんで見ゐる。

（おお、不滅の別離！）

酒杯の悲劇

上

さかづきを傾けるごとに、かれの
目にひらけくる、青山のみね、
紫立てるかすみ、また、かの
綠草をひたして流れる小川、
日の光、鳥の歌、こどもらの笑ひ。
さかづきを傾けるごとに、かれの

老眼のまへにかはりゆく、たのしい
風景――ささなみ光り、けぶる
入江、帆ばしる船、かをりよき
そよ風、ゆるやかに飛ぶあほう鳥。
日は椽に傾き、こもしつき、
家のめぐりにやみは襲ひ、
さかづきの底にかけは浮べど、
かれは之を離す力なく、目のまへを、
かはりゆく風景に心を奪はれ、
蕩として目をしばたたく。

ふるふ手にこぼれ落ちる麹の
しづく、杯の底から
ひらめき出る金蛇のごとく、
恐しく膝濡らすをも、
火山をつつむ氷河のごとく、
身はひゑ、しんはこげるをも、
かれは感ぜず傾けつづける。

けれど風物は一變した——
ただ見る瘴癘の沼澤林、
熱帶地の太陽にうちただれ、

緑は黒み、黄ばみ、蔽ひかぶさり、
沼地は蒸されて泥炭のけむりのごとく、
林のなかに封ぜられ、
全力をあげて押しかさなる碧空のもと、
うめきさへなく息をつまらした。

忽ち、櫻草が飛ぶやうに、
林中を走る少女、それを追ふ、
あしおこもしない小山のやうな虎——
まへを窺ひ、左右を見張り、
しはぶきもせず、やがて茂みの中に

消ゐ去る、まもなく、血をあび、あへぎ、
またあらはれる少女を目がけて、虎は
爪を張り、尾をあげて、うち掛る。

さかづきを滚れるしづくに夜はふけ、
梟は泣き、こもしまばたき、
まつしろき十一月の霜の寒さ、
鐘を氷らしてひびく時、
最後にかれの唇にふれた杯が
みぢんに飛んで燃ゐ立つた。

刹那――――かたはらの短刀をこつたこ思ふこ、
つつましく坐つてた妻を目掛けて、
矢庭にそれをふりかざし、
言ふまじき殘忍をののしりながら、
右に追ひ、左にせまり、前に、後に、
おごり上つて汗みごろに狂ひまはり、
軒下に吠えたける犬をもひるました。

やがて慓悍な三郎こ、母こ、
二人がかり、十重二十重にしめくくる
麻縄きびしく、狂亂の父の肉に、

くい入るほどにまきつくれば、ふと、
大海の音がとぎれたやうに、
大都會のさわぎがふとやんだやうに、
ほそほそときにのこる蟲さへきこゆる。

下

しひたぐるものの罪には
骨をけづる悔いのこもることがある。
けれどまじりなき悔いの心を
しひたげられた罪人に求めたら
求める者が愚かと思へ。

しひたげられたものの悔には、
罪の意識の深さに比例して、
自分の傷に對する恨みが強くつきまとふ。
三十五年、酒亂の夫から、父から、
暴虐のしもとを受け馴れたものらの
ふすぼり立てど燃ゆ上らない恨みは、
罪の奥にも恐しい神秘をこもらせた。

そは遠巻きの世間の、
干渉とまでにならぬつぶやき、
暗示、不明瞭な是認である。

邪神の宮を非こしながら、
非を言ふ恐怖を抱くものらの
あらしをかくす聲なき雲のうめきである。

けれごこのごすぐろい事實をば、
それで明るいものこするほごに、
二郎の醫眼はくもらなかつた。
一方うらみ、憐愍、絶望こ
一方ただすさまじい事實このけわしい二筋道に立ちながら、
理性は戀のやうに燃ゐ立つて、

彼は花咲く戀路を行くやうに、
事實の路をかけおりた。

かくて先づ母こ弟の斷罪が
絶壁こなつて彼をうちつけた、
千丈敷の鐵鎖の谷に向つて。
けれご事實の路はいよいよ急に、
いよいよ暗く、足は自然に飛んで、
しばし微笑せる醫道も消ゐ、耻ぢて、
青ざめた人間性は麴をたたへ、
死の淵を作つて彼をそこに投げこんだ。

そこは水草のやう、逆まに生にてゐる
兩刄の細身のつるぎ「滅び」を
なびかしてゐる魚(運命?)てんてんと
泡吐くやうに、死の雫、金の雫、
毒酒の雫、したたるなかに陷れば
いさぎよくまふたつに身は裂けて、
青苔淵は醉醒の清水のやうである。

大正十二年三月廿五日印刷
大正十二年四月一日發行
(特製金壹圓五拾錢)

版權所有

著者及發行者　兵庫縣武庫郡西灘村岩屋參拾五番地ノ壹　佐藤清
印刷所　大阪市西區土佐堀通四丁目　株式會社三有社
發行所　大阪市北區梅田町　上田書店
振替口座大阪四二八八番